

勢多家旧蔵延喜式について

On the *Engishiki* Formerly in the Possession of the Seta Family
AISO Takashi

相曾貴志

はじめに

延喜式は全巻がそろった古写本に恵まれなかったせいか、国史大系¹、川弘文館、一九三七年、神道大系（神道大系編纂会、一九九一・九三年。以下、神道大系本とする）の刊行の際に、江戸時代の版本（享保本）が底本に用いられた。しかし先ほど完結した『訳注日本史料延喜式』（集英社、二〇〇〇・〇七・一七年。以下、集英社本とする）では比較的善本とされる土御門家旧蔵の江戸期の写本（国立歴史民俗博物館蔵、田中文庫旧蔵）が底本に用いられた。

虎尾俊哉は神道大系本を校訂した経験から、近世の写本について、すべてが巻一三を欠く同一祖本から出たもので、さらに巻二四を有するものとそうでないものに分けられるとした。¹さらに近年では小倉慈司が虎尾の研究を踏まえ、近世の写本間の関係を検討した。²これに対して版本は、下條正男、早川万年、大日方克己³により版本に収められた跋等や校訂についての研究が進められた。しかし版本に書き込まれた諸本の情報

についての検討はこれまではほとんどされなかったようである。これら諸本の字句や体裁の差異等の書き込みから、校訂に用いた諸本の特徴の一端をうかがうことは出来ないだろうか。本稿では諸本による書き込みが多く見られる宮内庁書陵部図書寮文庫蔵の勢多家旧蔵本（函架番号一七二―一二三）を紹介するとともに、この本に見える書き込みからどのような情報を引き出すことができるかを検討してみたい。

一 勢多家旧蔵図書について

勢多家は法家中原氏の一流で、江戸時代には博士や大判事を歴任した家であり、治勝（一六二五―七九）が延宝三年（一六七五）に明法博士に任じられて以降、章甫（一八三〇―九四）に至るまで歴代その職を得ている。⁴章甫が自筆履歴書（「嘉永年中行事考証」坤（宮内庁書陵部図書寮文庫蔵、函架番号一七三―一二八）の冒頭に「旧檢非違使并執次役」として）に、勢多家の当主は代々檢非違使と執次に任じられている。江戸時代の檢非違使の職掌は、下橋敬長（一八四五―一九二四）に

よれば、正月七日北陣（罪人赦免の儀式）、四月の賀茂祭で路次警備の爲に行列に加わって社頭への参向、改元定の翌日に罪人の赦免の宣告等に従事する程度であるとし、勢多家と町口家が大判事・明法博士を隔代に務めたとする⁽⁵⁾。一方、執次は口向役人のひとつである。口向とは生計の意で、口向役人は食品の買入れ・調理から、広く住居の掃除・営繕、日用諸用度・会計までの職務を担当した。筆頭は御附武家で徳川幕府から派遣され、その下で執次が「御内儀諸般ノ事務ヲ総轄シ、侍分以下ノ進退黜陟ノ事ヲ処理ス」（松浦重剛「侍分職務概要」）⁽⁶⁾。下橋によれば、勢多以下十二家が執次を務める。この役は女官の執次であり、長橋局（勾当内侍）の支配を受け、ほとんど家来同様の取り扱いであるが、御附武家の代理をするため、御内儀では相当な勢力があったとする⁽⁷⁾。

宮内庁書陵部図書寮文庫で蔵されている勢多家関係図書の中から、奥書等に自筆署名等が見られる勢多家当主のなかで一番古い人物は治勝であり、彼は「勢多旧記」（無窮会図書館神習文庫蔵）にそれまでの勢多家の歴史や職掌を書き遺している⁽⁸⁾。

勢多家ほどの程度の蔵書があったか不明であるが、宮内庁書陵部図書寮文庫・同宮内公文書館の同家の関係図書は大正七年（一九一八）に宮内省式部職から図書寮に移管された本（以下、式部職移管本とする⁽⁹⁾）、明治二十三年（一八九〇）に図書寮が章甫から買い上げた本、執次の私的な職掌日記を主とした御用雑記類、章甫が宮内省図書寮に勤務するなかでまとめた著作類の大きく四つに分けられる⁽¹⁰⁾。

式部職移管本は古記録や法制書・儀式書といったものが多く、歴代の当主による校訂や考証による書き込みが随所に見られ、その一群に本稿で取り上げた延喜式も含まれている。ただしこれらの本が式部職より図書寮に移管された時期は分かるものの、式部職にいつ献納されたかについてはよく分かっていない。その手がかりになるのは明治十六年十二月二十日に式部寮（官制改革により明治十七年に式部職となる）で作成さ

れたリストに式部職移管本とみられる本の一群が含まれていることと、式部職移管本のなかの新抄格勅符（函架番号一七三一〇三）に明治七年十一月二十四日の日付を持つ章甫の奥書が見えることで、これらにより式部職移管本は少なくとも明治七年十一月二十四日から同十六年十二月二十日までの間に式部寮に入ったことが分かる。

これらが式部寮に献納された理由として、当時式部寮が儀式や制度の整備を行っていたことが考えられよう⁽¹¹⁾。また式部職移管本に捺してある勢多家の蔵書印のほとんどが朱筆で抹消されているが、延喜式に関しても同様に朱で抹消されている（図版3-1）。

二 勢多家旧蔵延喜式の書誌

本節では勢多家旧蔵延喜式の書誌について考察していきたい。本書は巻一より巻五〇迄を備えたもので、巻二と巻三が合綴されている他は各巻毎に一冊となっており、全四九冊からなる。このうち巻一、巻四、巻六は補写による写本であるが、他は版本である。これら版本のうち、巻五と巻七以降は、縹色無地表紙、五つ目綴じ、法量は縦二八・〇糎×横二〇・三糎で、勢多章純（一七三四～九五）の印である「家世明法儒中原氏図書」が捺されており、それぞれの巻末に「正四位下行左衛門大尉兼大判事明法博士中原治勝朝臣（印）」と治勝の署名が見られる（図版5-1）。これに対し、巻二と巻三は五つ目袋綴じである点はその冊と同じであるが、刷毛目表紙であり、「勢多蔵書」の印を持ち、法量も縦二七・〇糎×横二〇・〇糎と大きさが異なり、かつ治勝の署名がない。また巻二と巻三の本文を他の版本と比較してみると、鈴鹿文庫本（大和文華館蔵）に近いことが確認できる。

一方、補写された冊については巻六の奥書には、

件式一四六合三冊、嘉永甲寅之厄令^二焼失^一之間、令^二補写校訂^一畢、

安政三年十二月一日

とあり、嘉永七年（一八五四）の火災で焼失したために、安政三年（一八五六）に書写されたことが分かる。これらは刷毛目表紙、四つ目綴じ、章甫の印である「勢多蔵書」が捺されており、法量は縦二七・一糎×横一九・九糎である。

ここで治勝の署名に注目してみると、治勝が明法博士を兼任するのが延宝三年（一六七五）十月十七日、正四位上に叙されるのが同七年五月二日なので、この署名が書かれたのはこの間ということになり、この時期に本書を入手した可能性が高い。

本書は『和漢図書分類目録』下（宮内庁書陵部、一九五三年）では「慶安元版」としているが、これは慶安元年（一六四八）の林道春（羅山）（一五八三～一六五七）の跋があることによるとみられる。そこで各時期の版本の特徴を整理しながら、本書の刊行された時期について考えていきたい。

延喜式の版本は正保四年（一六四七）の清原（伏原）賢忠（一六〇二～一六六）の跋を持つ正保本が巻一三を欠く全四九巻で刊行された後、巻一三を補充し、慶安元年の道春の跋を加えた慶安本、次いで明暦三年（一六五七）の刊記を持つ明暦本、さらに巻九・巻一〇に校訂を加えた寛文本、寛文本を改訂した享保本が刊行されたと考えられている。この享保本が流布本として知られており、国史大系や神道大系本の底本となった。その後、文政十年（一八二七）に松江藩から刊行された雲州本が知られている⁽¹⁵⁾。以上を踏まえたうえで、勢多家旧蔵本がどの段階で刊行された本にあたるかを検討してみると、治勝の署名の時期から、少なくとも寛文本以前のものであることは分かる。ただ本書は寛文七年（一六六七）の跋を収めてはいるものの、後から書写されたもので、寛文本とも考えにくい。一方、本書は巻一三が存しており、羅山の跋を収めているので、巻一三を欠き正保四年の清原賢忠の跋のみを持つとされている正保本とも考えにくい。となると慶安本か明暦本ということになる。

そこで慶安本と明暦本の特徴についてももう少し詳しく見てみると、慶安本は二六冊からなり、「正保本に欠けていた巻第十三を新たに刻して補充し、一ないし三巻に収めて刊行したもの。正保本に存した賢忠の跋（ただし、その文中、版元たる「森光次沢田治章」七字を、同字数の「松柏堂林氏時元」に改刻し、しかも後文では二ヶ処にわたって、これと整合しない「両氏」の語を残したままとなっている）とともに、新たに林羅山の跋を付して」いる。一方、明暦本は五〇冊からなり、「明暦三丁酉仲秋吉旦」の刊年を記す刊記を有し、慶安本にあった賢忠・羅山の跋をそのまま載せていて、慶安本の増刷の感がある」とされている⁽¹⁶⁾。こうした特徴を踏まえて勢多家旧蔵本（③）を見てみると、後補されたり、合綴されたとみられる冊があるものの、巻一三があり、各巻毎に一冊となっているので、本来は五〇巻そろった五〇冊本であったとみられる。跋に関しては、賢忠と羅山の両方を有しており、賢忠の跋に関しては、「松柏堂林氏時元」と改刻されたものではなく、「森光次沢田治章」のままとなっている。すなわち本書は、跋は正保本のままで、巻数と冊数的には明暦本と同じということになるのである。これに似た体裁のものとして、書陵部図書寮文庫に松岡家本（②、函架番号四五九―一）がある。この本は巻五〇の末尾に「寛政二年五月一日松岡平次郎辰方（花押）」と署名があるが、旧蔵者の蔵書印と思われる箇所が抹消されているので、松岡辰方が古書として手に入れたものとみられ、寛政二年という年次は刊行の時期と密接な関係があるわけではない。この本にも賢忠と羅山の跋があり、賢忠の跋は改刻がされておらず、さらに賢忠の跋には勢多家旧蔵本に見えていない「清原」「賢忠」の二つの印が刻されている。同じくこの印を持つ本としては鈴鹿文庫本（①、大和文華館蔵）がある。これには羅山の跋がないが、巻一三を持つ五〇冊本である。そして鈴鹿文庫本の巻五の少なくとも二箇所が、松岡家本・勢多家旧蔵本では改刻されていることが確認できる。そこでこれらの本と参考のために慶安本

と考えられている徳川家宣⁽¹⁷⁾(一六六三―一七二二)旧蔵本⁽⁴⁾、国立公文書館蔵、函架番号特二六―一⁽¹⁸⁾を加えて、それぞれの特徴を整理してみると、以下ようになる。

①鈴鹿文庫本 五〇巻(五〇冊)

清原賢忠の跋のみで林羅山の跋を持たない。清原賢忠の跋はオリジナルのまま改刻はなく、「清原」「賢忠」の印あり。巻五の改刻なし。明暦の刊記を持たない。

②松岡家本 五〇巻(五〇冊)

清原賢忠の跋と林羅山の跋を持つ。清原賢忠の跋はオリジナルのまま改刻はなく、「清原」「賢忠」の印あり。巻五の3祓禊条「伊勢」の下に「斎」、17鎮野宮地祭の「調布一端」の下に「庸布五段」が改刻により補充されている。明暦の刊記を持たない。

③勢多家旧蔵本 五〇巻(四九冊)

清原賢忠の跋と林羅山の跋を持つ。清原賢忠の跋はオリジナルのまま改刻はない。「清原」「賢忠」の印なし。巻五の3祓禊条「伊勢」の下に「斎」(図版1-1)、17鎮野宮地祭の「調布一段」の下に「庸布五段」が改刻により補充されている(図版1-2)。明暦の刊記を持たない。

④徳川家宣旧蔵本 四八巻(巻七・八欠、二五冊)

清原賢忠の跋と林羅山の跋を持つ。清原賢忠の跋は「松柏堂林氏時元」と改刻されている。「清原」「賢忠」の印なし。巻五の3祓禊条「伊勢」の下に「斎」、17鎮野宮地祭の「調布一段」の下に「庸布五段」が改刻により補充されている。明暦の刊記を持たない。

おそらくこれらは本文の改刻、跋の印の削除、跋の本文の改刻の順で改刻が行われたと考えられることから、①②③④の順で刊行されたとみられるべきであろう。

このように巻一三を含む五〇冊本で、徳川家宣旧蔵本以前に改刻されていない賢忠の跋と羅山の跋を持つ本があり、そのなかにさらに賢忠の

跋に印を持つものと持たないものがあること等、複数の種類の本があることから、果たして徳川家宣旧蔵本を慶安本として良いかという疑問が生じてくる。また巻五の場合だけ見ても、本文に改刻が確認できることから、さらに跋や刊記だけではなく、全体を通して本文の改刻に関しても比較検討する必要があるのではあるまいか。そのうえで徳川家宣旧蔵本が慶安本であるか否かの判断や、もし違うのならば、どの本が慶安本にあたるのか等を考察すべきであろうと思われる。以上より、現時点では勢多家旧蔵延喜式はどの本にあたるかを確定することは難しく、本稿では徳川家宣旧蔵本の前の段階に位置する可能性が高いという指摘にとどめておきたい。

三 勢多家歴代当主による校訂

治勝については巻五以降(後補の巻六を除く)の巻末に署名が見えるが、彼のものと断定できるような書き込みは見えない。また巻三八と巻三九に「彈正少忠章義謹校」とあるが、「章義」は寛政五年(一七九三)十一月に改名した章純の子である章斐(一七六一―一八二五)のことである。⁽¹⁹⁾彼の署名はこの二巻のみで、章斐によると思しき書き込みが若干見える。⁽²⁰⁾これに対し全巻にわたり書き込みが見えるのが章純、章武(章斐の子、一七九二―一八五八)、章甫(章武の子)のものである。

章純の書き込みは章武や章甫に比べると少ないが、寛文七年松下見林の「書于神名帳後」は彼によるものとみられる(図版5-1-3)。これは本来なら巻一〇の巻末に収められているものであるが、勢多家旧蔵延喜式では巻五〇の巻末に収められている。また同巻には、

別当公麗卿(滋野井殿) 出所、秘蔵于其家府之校正本賜二覧、
因謹加二校訂一者也、

中原章純(印)

とあることから(図版5-1-3)、章純は滋野井公麗(一七三三―八一)の

本を用いて校訂を行ったことが分かる。

この他に章純のものと見られる奥書が巻四七の巻末に、

此延喜式以_二出納右近將監職甫家藏之古本〔靖庵時代之書写歟〕、
自_二去年_一至_二今年_一校合之訓点以_レ朱直付了、雖_レ然猶不審之所々任
_レ本者也、但件本兵衛式以後紛失云々、可_レ惜々々々、

元文五年閏七月十一日五雲雙 七十一才

右兵衛式奥書也、

とある(図版4)。これによればこの奥書があった本は平田職甫(一七〇九
〜四八)の「古本」で校訂したが、その本は兵衛式から後の巻は紛失し
ているとしている。そして平田家の本は「靖庵」時代に書写されたもの
かとしている。今のところ「靖庵」が平田家の誰にあたるか特定でき
ていない。さて問題は、この奥書がどの本にあったかということである。こ
こに見える「五雲」は元文五年(一七四〇)に七一歳であったとしている。
一方、滋野井公麗の祖父である公澄(一六七〇〜一七五六)は「五松軒」
と号しており、『国書人名辞典』二、四一〇頁、(岩波書店、一九九五年)、
同年に七一歳であった。両者は年齢と「五」まで同じであることから、
同一の人物であり、公澄の号を知らない人間が「松(姿)」を「雲」と
誤写した可能性は考えられないだろうか。もしそうだとしたらこれは滋
野井家本にあった公澄の奥書ということになり、滋野井家本は平田家本
を用いて校訂したことになる。⁽²¹⁾なお巻九には5山城国条の葛野郡のこ
ろに「公澄考三代実録第二卷貞観元年己卯正月廿七日甲申京畿七道諸神
進階及新叙惣二六七社――山城国――從五位下樺井月読神木島
天照御魂神和伎神並正五位下」と公澄の名前がある押紙が見えている
が、これはもともと滋野井家本にあったものとしてよいだろう。

章純の書き込みの多くは和名抄、元秘別録、延喜式の他巻の式、令、
中国の古典等で関連する条文や記事を書き抜いたものであるが、これが
章純が直接抜き書きしたものか、章純が校訂に用いた本に拠るものかは

判断が難しい。ただし校訂で使用した本に関しては、特に注記がないの
で、滋野井家本一本によるとみてよいのではなからうか。

以上の点を踏まえたうえで、近世の写本の特徴である巻一三と巻二四
の有無について確認すると、両者ともに章純による校訂が見られること
から、滋野井家本に巻一三と巻二四が存していた可能性がある。

次いで章武による校訂について見ていくこととしたい。巻五〇に明治
二年六月十日の日付を持つ章甫の朱筆の奥書がある(図版5-4)。

件一部往年先考以_二寿榮朝臣_一恩_二借_二二条殿古本_一而被_レ校_二正之_一〔標
〇本乎古止點同〕、亦有_レ別以下出雲本〔標出〕山田翁本〔標イ或校本〕
等与_二学生_一照読之本_上令_二悉移_レ点、此本聊拠_二史典_一書加畢、

明治二年六月十日 大判事兼明法博士左衛門大尉中原朝臣
(花押)

これによれば「先考」(章武)は「寿榮」の斡旋により、「二条殿古本」
を借りて校訂を行ったとし、その校訂については「〇本」と標するとと
もに、乎古止点も同様に付したとする。同様に巻五の表紙見返しに朱筆
で「〇本二条殿御本〔乎古止點亦同〕」とあるが、これも章甫が備忘の
ために注記したものとみられる。

さてこの奥書に見える「寿榮」は沢村寿榮(一八〇八〜?)のことだ
がある。沢村家は勢多家同様に検非違使の家系で、朝廷において執次を務
める家であり、職務上でも勢多家と関係があったことがうかがえる。寿
榮に関しては、「野宮定功日記」(宮内庁書陵部図書寮文庫蔵、函架番号
野一七)天保十三年八月二日条に、

未許、東園大夫来臨即相伴、向_二沢村出雲守寿榮〔検非違使也〕許、
勢田大判事章武事朝臣〔同検非違使也、當時有_二識達之間_一人也〕、
平田権少外記中原職孚、其他三四輩同在_レ座、見_二江家次第〔第一
卷〕、黄昏帰宅、

とあり、江家次第の会説を通して章武と交流があったことが分かる。

またここで章武は定功（一八一五～八一）に「當時有識達之間一人」と評されており、同日記天保十四年十二月九日条にも、定功が中山忠能（一八〇九～八八）邸で東坊城聡長（一七九九～一八六一）や章武と類聚国史の校合をはじめた記事が見え、ここでも定功は章武のことを「識達人」と評しており、章武は同時代の公家から評価されていたことが分かる。²⁵佐竹朋子によれば、寿栄のもとでの勉強会は江家次第のあと、令義解、北山抄、延喜式と続いたとしているので、²⁶寿栄は延喜式に関する情報に詳しく、公家達と交流するなかで二条家の蔵本の存在を知っていたのかもしれない。延喜式の勉強会に関する記事に章武の名前は見えないので、章武がこれに参加していたか否かは不明であるが、職務上のみならず、学問的にもつながりがあった寿栄を通して、二条家の本を斡旋してもらったことは想像に難くない。

二条家で蔵していた延喜式は現在伝えられていないが、いかなる本であったのだろうか。二条家本の書き込みは巻五及び巻七以降のすべての巻に見られるので、巻一三と巻二四を備えた本であったことが分かるが、巻一三に関しては注意を要する。

周知の通り、巻一三は九条家本を書写した尾張本を底本として、慶安の改刻の際に新たに補充されたが、冒頭部分を大きく欠いている。勢多家旧蔵本では二条家本（「〇本校」）による復原案や章甫が校訂に用いた山田以文の校訂本にあったとみられる「以文考」「以文按」といった書き込みが見えている。

一丁目冒頭に「〇本題云中宮大舍人圖書右之三司不足」「〇本闕新写補之」となっているが、「〇本闕新写補之」とあることから、もともと二条家本には巻一三が欠けており、新写して巻一三を加えたことがうかがえる。

内題部分は朱筆で「元日御薬」とあり、本文にあたる部分は「散」の下に「典藥寮進之」、「典藥一人」の下に「奏進畢」、「舍人」の上に「内」

「拝礼」の下に「事」、「太子昇自」の下「東階朝」といった復原案が記されており、いずれも「〇本校」と朱筆の注記が見られる。ここで「〇本校」とあることから、新写した巻一三にさらに校訂により復元案を加えたということになる。

一方、本文の復原案と同じものは旧版国史大系の「一本」の他、「玉簾三十二抄」（無窮会図書館神習文庫蔵）があり、さらに管見の限りでは鈴鹿文庫本、庭田家本（宮内庁書陵部図書寮文庫蔵、函架番号二六四一六八八）にも見えている。

このなかで「玉簾三十二抄」は井上頼圀（一八三九～一九一四）が蒐集した史料のうちで、「流布版本を底本として、校訂の要ある行のみを原位置を保って抜き書きし、これに一本によって所要の改訂を施」したものである。²⁷頼圀は明治十七年より大正三年（一九一四）まで宮内省図書寮に在職しており、²⁸同時期に章甫も図書寮に嘱託として勤務しており（明治十九年～同二十六年）、また両者は『古事類苑』の編纂にも関わっていた。この当時、延喜式を含む式部職移管本は式部職に蔵されていたことから、頼圀は「玉簾三十二抄」を作成するなかで、勢多家旧蔵本の巻一三の存在を知っていてもおかしくないはずである。しかし両者を比べてみると「玉簾三十二抄」には「此条虫損不_レ可_三強解_一」の書き込みがあるが、勢多家旧蔵本にはなく、勢多家旧蔵本にある校訂部分が、「玉簾三十二抄」に存していない箇所が見られる。以上より「玉簾三十二抄」作成に際して、頼圀が勢多家旧蔵本を見ていない可能性が高い。一方、「此条虫損不_レ可_三強解_一」の文言が見えている鈴鹿文庫本や庭田家本の冒頭以外の校訂箇所も「玉簾三十二抄」とは完全に一致しない。²⁹

二条家本による校訂を見ていくと、「〇本同」とある箇所が見える（図版3-1・2）。章武による校訂で「同」とするのは、少なくとも巻三八、巻三九以外は章純の校訂した部分（滋野井家本）とみられる。このことから二条家本と滋野井家本は共通する部分を持つ本であったこと

がうかがえる。

二条家本で注目したいのが壬生家本（宮内庁書陵部圖書寮文庫蔵、函架番号F一〇―二八七）との関係である。⁽³⁰⁾ 壬生家本は巻一から巻八までと巻一三の九巻分を欠き、巻一四以外は二巻で一冊となっており、二一冊からなるが、これら各冊の表紙には「共廿五」となっていることから、もとは巻一三を欠く四九巻、二五冊からなっていたとみられる。⁽³¹⁾ しかし現存しない巻一から巻八のうち、巻五の途中（56神嘗祭使条）までは清岡（菅原）長親（一七七二―一八二二）が校訂を行った鈴鹿文庫本で校訂に用いられており、その特徴の一端をうかがうことができる。⁽³²⁾

ここで特に注目したいのは勢多家旧蔵本には短冊（尺）草の書き込みが見えている巻五である。以下に掲げてみると、いずれも朱筆で、

- ①「依」御短冊「新加イ」（5忌詞条）（図版1―1）
- ②「依」御短冊「准」齋院式「改作イ」（6河頭祓条）
- ③「〇本依」御短冊「以上唐宮諸門立」賢木「一条注新」置「此条」イニ（12臨時祓料条）
- ④「〇本依」度々御短冊「如」別当「イニ」（15別当以下員条）
- ⑤「新嘗会及向」度会宮「令」依「御短冊」イ〇本（63卜庭神祭祭）

とある。これらは九条家冊子本（西田長男旧蔵。『九条家旧蔵冊子本延喜齋宮式』（國學院大学神道史学会、一九七八年））に見える短尺草の書き込みとほぼ一致する（②では「イ」が「イニ」、③では「短冊」が「短尺」、「如別当」が「加別当」、⑤では「短冊」が「短尺」となっている⁽³³⁾）。その他の字句等の校訂による異同は余り多くないが、単位の「枚」と「枝」に関して一致しない部分が目立ち、九条家冊子本で傍書して加筆している部分が二条家本では存していない箇所が多いようである。

一方、鈴鹿文庫本に見える壬生家本の書き込みのうち、短冊（尺）については、①から④まで一致する（③は「短冊」の「冊」が「尺」となっており、九条家冊子本と一致。なお長親の校訂は⑤の部分に至る前中で

断している）。この他の二条家本による校訂部分と鈴鹿文庫本の壬生家本による校訂部分を比較してみると、一致する部分もあるものの、例えば17鎮野宮地祭条で「雑海菜各」とする書き込みが二条家本にはないのに対して、鈴鹿文庫本では「柀本」としてこの書き込みがあることから、壬生家本ではこの文言が存していたことがうかがえる。同様に21野宮祓清料条、26大祓条の「滑海藻各」、29野宮新嘗祭条の「滑海藻」も二条家本にはないとするが、鈴鹿文庫本では壬生家本の書き込みがない。ちなみに前節で指摘した巻五の改刻の部分に関しては、3祓禊条「伊勢」の下「齋」については、「〇本无」とあるので、二条家本には無かったとみられる。鈴鹿文庫本では「齋」を加えた箇所に「柀校本」とあるので、壬生本で校訂に用いられた「校本」によって「齋」の字を加えたものとみられる。一方、17鎮野宮地祭の「調布一端」の下「庸布五段」に関しては、「〇本校」とあるので、二条家本ではこの四文字が校訂により加えられたことがうかがえる。なお鈴鹿文庫本の当該箇所には壬生本による書き込みが見えないので、壬生本には鈴鹿文庫本同様に「庸布五段」が存していなかった可能性が高い。

次に比べてみたいのは巻一七である。集英社本の校異補注によれば（中、一〇八六頁）、巻一七の標注は底本である土御門家本になく、井上頼圀旧蔵本（無窮会図書館神習文庫蔵）と壬生家本にあるとしているが、壬生家本は井上頼圀旧蔵本よりさらに六箇所多くの標注が付されている⁽³⁴⁾。一方、勢多家旧蔵本にも標注が見えているので、両者の標注について比べてみたい。壬生家本に付されている標注は四二箇所であり、勢多家旧蔵本にある標注は三四箇所である。勢多家旧蔵本の標注の内訳は章純によるものが一九箇所、二条家本によるものが一八箇所あり、三箇所には章純による標注に「〇本同」というように注記されているので、この部分は両方の本に存していたことがわかる。⁽³⁵⁾ ただし壬生家本にはなく、勢多家旧蔵本のみに見える標注はない。本文の字句の異同については、

勢多家旧蔵本と壬生家本は同じ部分が多く見えるものの、例えば33賀茂装束条における「銀箸台二口料」の「功」において、「中功十人」の上に二条家本では「中功八人」が竄入している（土御門家本も同じ）のに対し、壬生家本にはそうした語句は見えない等、字句の異同が見える他、改行等体裁に関してはやや異なる部分が見られる。

このように二条家本と壬生家本で巻五の短冊（尺）や巻一七の標注を中心に両者を比べてみた。それによるとこれらは特徴的な書き込みをはじめとして、共通する箇所はあるものの、細かい部分で異なる部分が見られた。このことから両者は大変近い関係とはいいたいようであるが、同じ系統か、もしくは同じ系統の本を校訂に用いている可能性は考えても良いのではないと思われる。

最後に章甫による校訂について見ていくこととしたい。巻一から巻五には藍筆による校訂が見えており（図版1-1・2）、これと同じ藍筆で巻一の一丁目に「一条殿古卷无此条」とあり、同巻の奥書に「安政五年十一月十八日以古卷校訂之、加頭書并乎古止點畢、大判事（花押）」とある。さらに巻五の巻末にも「文久元年三月三十日以古写本一校畢、明法博士中原（花押）（藍筆）が見えている。安政五年（一八五八）正月に章武が亡くなり、章甫は同年の正月に明法博士に任じられ、三月に大判事を兼ねることとなった。⁽³⁶⁾ このことから巻一、巻五の奥書に見える「大判事」「明法博士」は章甫のことであり、藍筆も章甫による校訂であることが分かる。また書写された巻一、巻四、巻六は「甫考」とある章甫の説や藍筆、そして後述する山田以文校訂本による書き込みがほとんどで、章武以前の当主によるものは見えないことから、これらを書写したのも章甫とみてよいだろう。巻二・三に関しても、同様に章武以前の当主の書き込みや治勝の署名等もなく、章甫によるものしか見えないこと、蔵書印も章甫のものとみられる「勢多蔵書」印が捺されていることより、章甫により後補されたものと思われる。⁽³⁷⁾

「一条殿古本」は一条家に蔵されていた本とみられ、巻一と巻五の奥書より章甫は少なくとも安政五年十一月十八日以前から文久元年（一八六一）三月三十日あたりまで、一条家に蔵されていた延喜式の「古卷」を用いて校訂していたことがうかがえる。

一条家の延喜式として知られるのは戦災で焼失した巻一から巻五までの本である（以下、一条家卷子本と称する⁽³⁸⁾）。この本は現存しないものの、巻四・巻五に関しては昭和三年（一九二八）に神宮司庁でコロタイプ複製が作成されており（「延喜式伊勢大神宮齋宮」）、またそれ以前に「忠実な影写本」が作成され、現在、無窮会図書館神習文庫に蔵されている。⁽³⁹⁾ そこでコロタイプ複製がある巻四・巻五と勢多家旧蔵本の藍筆の書き込みを比べてみると、体裁や字句についてほとんど一致することから、勢多家旧蔵本で校訂に用いている「一条殿古本」は一条家卷子本であったとみられる。ちなみに一条家卷子本では巻五37野宮年料供物条における「望陀布一端」以下「調布七端九尺」が欠失しているが、先に紹介した二条家本ではこの部分に特に注記がないので、二条家本にはこの部分が存していたとみられる。その他に一条家卷子本で傍書して加筆した部分が二条家本には見えないなど、一条家卷子本と二条家本には少なからず異同があるようである。

神習文庫に蔵されている一条家卷子本の影写本は同文庫では勢多本とされている。神習文庫には勢多本と称される本の他にも、勢多家歴代当主や勢多家関係の史料が収められているが、これらはいずれも勢多家旧蔵であった可能性が高く、この延喜式の影写本も勢多家旧蔵であったとみてよいと思われる。影写本上冊末尾に「一条公爵家所蔵元弘年中写本之影写」とある。「一条公爵」とあることから、少なくともこの奥書部分は明治のものである。⁽⁴⁰⁾ 書写も同じく明治に入ってからのもものかもしれないが、詳しいことはよく分からない。また同奥書に一条家卷子本の書写時期を「元弘年中写本」とするが、その根拠は不明である。⁽⁴¹⁾

勢多家と一条家の関係がどのようなものであったのかについてはよく分らないが、同じく宮内庁書陵部図書寮文庫に蔵されている勢多家旧蔵図書の中の続日本後紀（函架番号二七三―一二二）も一条家本で校訂していることから、少なくとも勢多家では一条家の蔵書を閲覧することができるといえる。関係は持っていたことがうかがえる。

章甫はこれに二条家本の校訂のところで掲げた明治二年六月十日の日付を持つ奥書で、「出雲本」と「山田翁本」を「学生」と「照読」した本の「点」を転記したとし、その本には聊か「史典」によって加筆したとする。⁽⁴²⁾「出雲本」は文政十一年（一八二八）に松江藩から刊行された版本（雲州本）のことであり、茶筆で「出」の注記がある書き込みが見られる（図版3―2）。一方、「山田翁本」は山田以文（一七六一―一八三五）による書き込みのある本とみられるが、巻五〇にはさらに以下のような奥書がある（図版5―4）。

（明治二）
同年十月十日借^三以文翁手沢之本^三書入^了、其奥書云、

享和三年五月於^三東京極梨陰蝸舎^三重校訖、

吉田社公文所 藤原以文

対校 御厨子所宗孝 隼人佑源武貞

寛政二年五月申^三請 京極宮御本^一与^三積興宿祢等庭朝臣宗孝等^二校正^了、原本古写本殊勝之書校合中称^三京御本^一是也、其後与^三経亮^一校合訖、此時原本日野殿旧蔵写本也、

以文

これによれば明治二年十月に「以文翁手沢之本」の書き込みを書き入れたことが分かり、その本の奥書をここに書き写している。この奥書に見える「武貞」は土山武貞（一七八一―一八二七）、「宗孝」は高橋宗孝（一七六二―一八一五）、「積興宿祢」は尾崎積興（一七四七―一八二七）、「等庭朝臣」は浜嶋等庭（一七四七―一八二二）、「経亮」は橋本経亮（一七五五―一八〇五）とみられる。この奥書から山田以文が

「京極宮御本」や「日野殿旧蔵写本」を校訂に使っていたことがうかがえ興味深い。山田以文の校訂については、筆者には任が重く、また本稿の目的からやや離れるので、これらの奥書の紹介のみに留めたい。⁽⁴³⁾ただしこの奥書で注目すべき人物として土山武貞を名前を掲げておきたい。土山家は勢多家と同様に朝廷において執次を務める家柄であり、武貞の父である武辰（一七五九―一八二七）は勢多章純とともに寛政度内裏造営の際に御指図御用掛に任じられ活躍している。⁽⁴⁴⁾このように勢多家の他にも執次を務める沢田家や土山家でも延喜式の校訂に関心を持っていたことが分かる。

むすび

これまで勢多家旧蔵本延喜式を紹介してきたが、当本は版本であるにもかかわらず、いろいろな問題を提起してくれている。まずどの時期の版本であるかが判然としないことがあげられる。こうした本文や跋文の改刻を丹念に見ていくことにより、もう少し版本の刊行の状況が明らかになるかと思われる。

次いで校訂者であるが、当本には治勝より章甫迄の勢多家当主の書き入れ等が見られる。そのうち章純は滋野井家本、章武は二条家本、章甫は一条家卷子本と山田以文校訂本を中心に校訂を行っていた。このうち滋野井家本と二条家本はこれまで知られていなかった本であるが、こうした版本の校訂から、不十分ではあるものの、他の本との共通点などを垣間見ることができた。特に二条家本には巻五の短冊、巻一七の標注等、興味深い書き込みが多く見られることから、さらなる比較検討が可能かと思われる。

このように勢多家旧蔵延喜式は勢多家歴代当主が諸家の本で校訂を行った貴重な本であることから、今後の詳細な検討が期待されるのである。⁽⁴⁵⁾

註

- (1) 「延喜式写本についての覚書」〔「延喜式研究」一四、一九九八年〕。
- (2) 「『延喜式』写本系統の基礎的研究—巻五を中心に—」〔「日本古代史の方法と意義」(勉誠出版、二〇一八年)〕、「延喜式」土御門本と近衛本の検討—巻五を中心に—」〔「史料・史跡と古代社会」(吉川弘文館、二〇一八年)〕。
- (3) 下條正男「立野春節と延喜式雕板」〔「史学研究集録」六、一九八一年〕、早川万年「延喜式の版本について」〔「延喜式研究」一、一九八八年〕、大日方克己「雲州本『延喜式』の校訂と藍川慎」〔「島根大学法文学部紀要社会文化学科編社会文化論集」一一、二〇一五年〕。
- (4) 利光三津夫「法家『勢多』「町口」両氏についての覚書」〔「神道大系月報」六四、一九八七年〕。
- (5) 平井誠二「下橋敬長談話筆記」—翻刻と解題—(二)〔「大倉山論集」四八、二〇〇二年〕、同「下橋敬長の各種談話記録—翻刻と解題—」〔「大倉山論集」五一、二〇〇五年〕。
- (6) 羽倉敬尚「解説」〔「幕末の宮廷」所収(平凡社、一九七九年、一九六五年初出)〕。
- (7) 平井誠二前掲註(5)「下橋敬長の各種談話記録—翻刻と解題—」。章斐は「長橋雜記」を、章武も「長橋殿雜記」を遺している。
- (8) 吉田通子「勢多旧記」〔「勢多章甫氏雜録」に関する基礎的考察〕〔「法学研究」六二—五、一九八九年〕。
- (9) 「大正七年図書録」第四号〔宮内庁書陵部宮内公文書館蔵〕。
- (10) 「勢多章甫と勢多家関係図書」〔「書陵部紀要」六九、二〇一八年〕。
- (11) 「明治十六年図書録」第二号〔宮内庁書陵部宮内公文書館蔵〕。
- (12) 相曾貴志「『式部寮記録』と宮内省式部寮の成立」〔「史潮」新六三、二〇〇八年〕。
- (13) 「図書寮叢刊書陵部蔵書印譜」上、一一八—九頁〔宮内庁、一九九六年〕。
- (14) 「地下家伝」九、四一—四頁〔日本古典全集刊行会、一九三七年〕。
- (15) 虎尾俊哉解説〔「訳注日本史料延喜式」上、集英社、二〇〇〇年〕。
- (16) 虎尾前掲註(15)解説。
- (17) 早川前掲註(3)論文。
- (18) この本は「官庫書籍目録」〔鶴見大学図書館蔵〕の六冊目の「桜田御文庫御書物目録」に見える「延喜式廿六」にあたりとみられることから(白井和樹「図書寮蔵紅葉山御文庫目録(一)」〔「書陵部紀要」六八、二〇一七年〕)、延喜式は桜田文庫に収められていたことがうかがえる。桜田文庫は徳川家宣の蔵書とされていることから(福井保「『紅葉山文庫』四〇—四二頁、郷学舎、一九八〇年)、本稿ではこの延喜式を「徳川家宣旧蔵本」と呼ぶこととした。なお、徳川家宣旧蔵本のうち現存しない巻七・八は明治六年の皇居火災で焼失した(福井保「明治六年秘閣焼失書目」〔「北の丸」七、一九七六年〕)。
- (19) 「地下家伝」九、四一—七頁。
- (20) 巻三八、巻三九にやや薄い墨による校訂が散見できる。これらは章純のものと比して墨の濃さや筆跡が異なるので、章斐による可能性が考えられるが、校訂の根拠になっている文献や諸本等の注記は見えない。
- (21) 巻三七の冒頭には章純による「以下点之分イ本注非」式文也、出納所持之古本ナシ、傍書也」とある書き込みがある。この「出納所持之古本」は平田家本とみられるが、滋野井公澄が校訂にこの本を用いたとするならば、この書き込みは滋野井家本に存していたと考えられる。
- (22) 虎尾前掲註(1)論文。
- (23) 「地下家伝」九、四四七—四四八頁。
- (24) 下橋敬長「幕末の宮廷」一五三—一五五頁(一九七九年、平凡社)。
- (25) 相曾前掲註(10)論文。
- (26) 「学習院学問所設立の歴史的意義」〔「京都女子大学大学院研究紀要」史学編二、二〇〇三年〕。
- (27) 虎尾前掲註(15)解説。
- (28) 「図書寮史料」二ノ上〔宮内庁書陵部宮内公文書館蔵〕。
- (29) 頼圀の没後まもなくに刊行された図書寮の図書目録である「帝室和漢図書目録」〔宮内省図書寮、一九一六年〕に見える大正五年当時図書寮で蔵していたとみられる延喜式の巻一三の冒頭部分を見ると、「此条虫損不可強解」という注記を持ち、欠損部分を補訂している本はない。ちなみに庭田家の蔵書は昭和十四年に図書寮に献納された〔「書陵部紀要」一、一九五一年〕ので、頼圀の在職中には図書寮に架蔵されていない。
- (30) 図書寮文庫に蔵されている勢多家旧蔵図書のうち、文政年間に章武が壬生以寧本で令集解(函架番号一七一—二八五)を、また嘉永七年、安政五年に章甫が内裏式(函架番号一七三—一三九)を「称本」(壬生家本)でそれぞれ校訂しているなど(相曾前掲註(10)論文、勢多家と壬生家との交流はうかがえるものの、延喜式に関しては壬生家本によって校訂をしたというような注記等はない)。
- (31) 相曾貴志「壬生家本延喜式について」〔「延喜式研究」一〇、一九九五年〕。
- (32) 長親の奥書によれば、文政三年(一八二〇)の十一月三日(巻一)から十二月四日(巻四)まで「小槻以寧宿祿所蔵古写本」(巻一奥書)で校訂したとする。その後校訂は続けられ、巻五に関しては巻末まで校訂が終わった後に奥書を書くつもりだったものが、何らかの理由で最後まで校訂が出来なかったために奥書が書かれないままになってしまったのではなからうか。
- (33) 京都国立博物館所蔵京都博物館旧蔵本にも短冊(尺)の書き入れがある(小倉

前掲註(2)〔『延喜式』写本系統の基礎的研究―巻五を中心に〕。

(34) 相曾前掲註(31) 論文。

(35) このうち7朱漆器条の「台盤一面」〔集英社本中三九〇頁一行目〕に「弘」とあるが、壬生本と勢多家旧蔵本にはさらに「台盤一面〔長四尺、広三尺二寸五分〕料」の「料」のところに「弘」とあり(図版2)、集英社本ではこの標注が落ちてゐる。

(36) 相曾前掲註(10) 論文。

(37) 巻三の二七丁ウラに「武箋」とある押紙があり、北山抄を引用している。「武箋」は章武の付「箋」とみられるが、章武の場合、他の箇所では「武按」という表現を使っており、「武箋」とするのはこのみである。そもそも自ら章「武」の「箋」によるという表現は使わないのではなからうか。したがってここに見える「武箋」は章甫が章武の付「箋」を転記したものと考えておきたい。

(38) 一条家にはこの他に「一条家別本」とされた冊子本が存していた(虎尾前掲(15) 解説。その本といかなる関係であるか不明であるが、鈴鹿文庫本巻一一の奥書には文政三年十月に「一条殿写本」、巻一二の奥書にも同年同月に「桃花」本で校訂をしたことが見えてゐる。

(39) 虎尾前掲註(15) 解説。

(40) 明治十七年七月七日に一条実輝(一八六六―一九二四)に公爵が授けられた(『明治天皇紀』六、明治十七年七月七日条〔吉川弘文館、一九七一年〕)。また先に紹介した「玉籠三十二抄」とこの一条家本の影写本は同じ料紙による表紙が付けられていることから、影写本の表紙は少なくとも勢多家で付けられたものではないことが分かる。

(41) 虎尾前掲註(1) 論文。

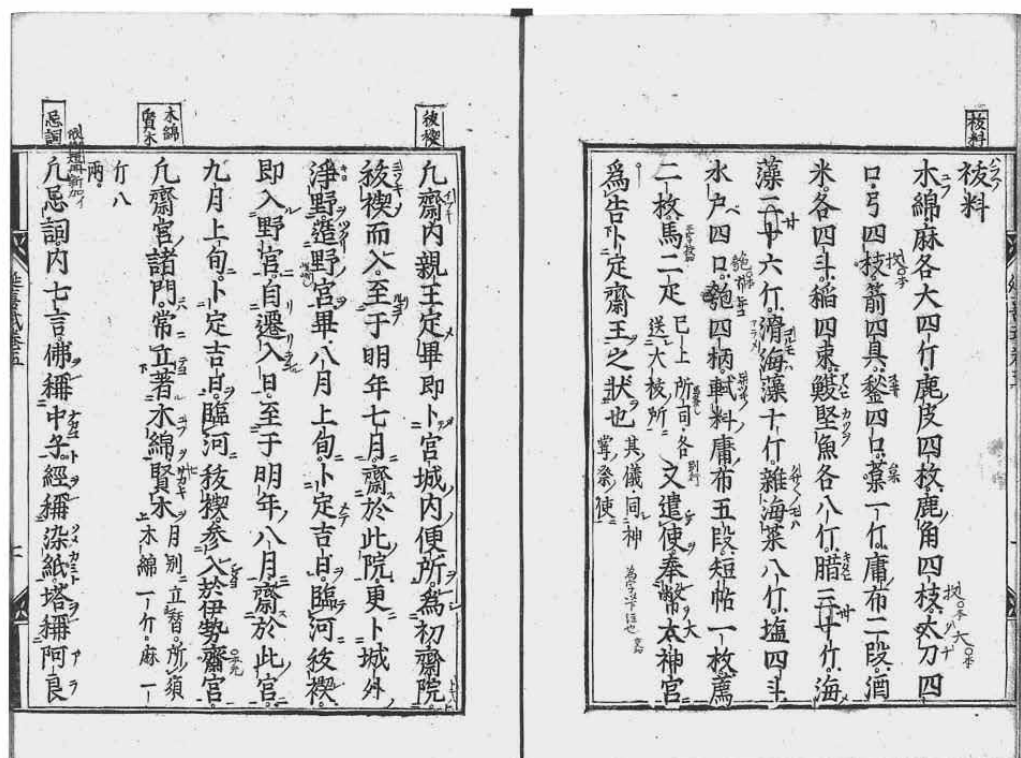
(42) 無窮会神習文庫に勢多章甫校の17冊本がある。この本について、下條は賢忠の跋に改刻がなく、「清原」「賢忠」の印が見えるとしているので(下條前掲註(3) 論文)、本稿で扱った鈴鹿文庫本や松岡家本と同様な時期の版本であることがうかがえる。したがって書陵部蔵の勢多家旧蔵本と比較検討すべきであるが、現在、無窮会が改装工事のため閲覧が出来ないので、これらの検討に関しては今後の課題としたい。

(43) 「地下家伝」一六、八二頁。

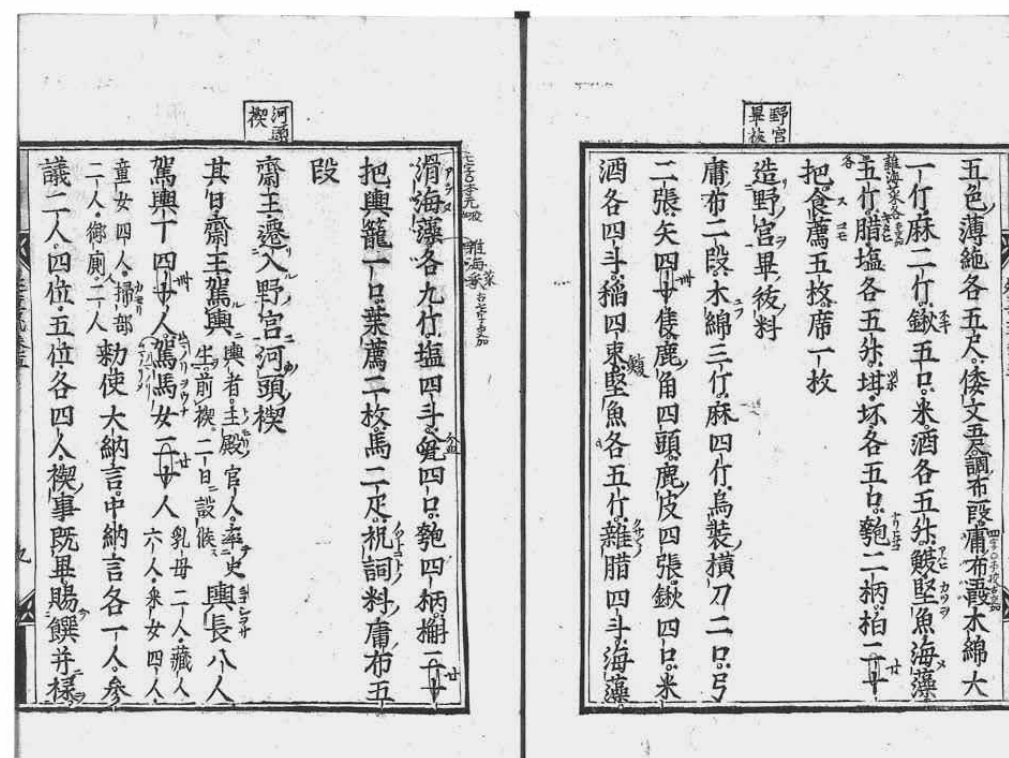
(44) 相曾前掲註(10) 論文。

(宮内庁書陵部、国立歴史民俗博物館共同研究員)

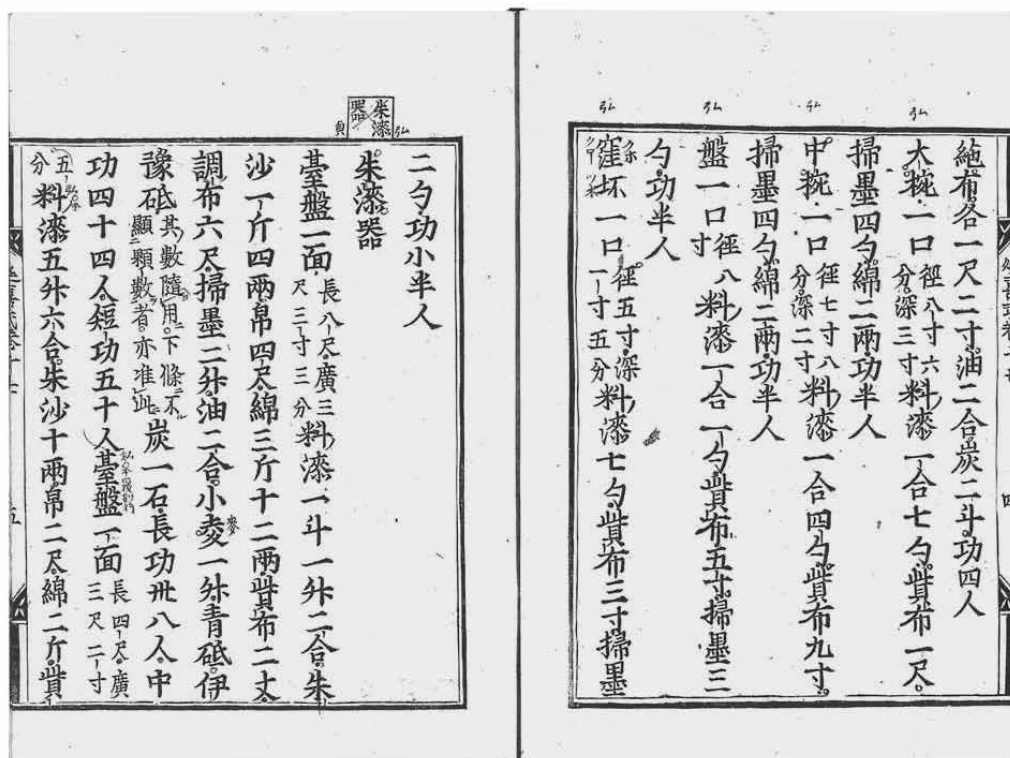
(二〇一八年九月一八日受付、二〇一九年二月六日審査終了)



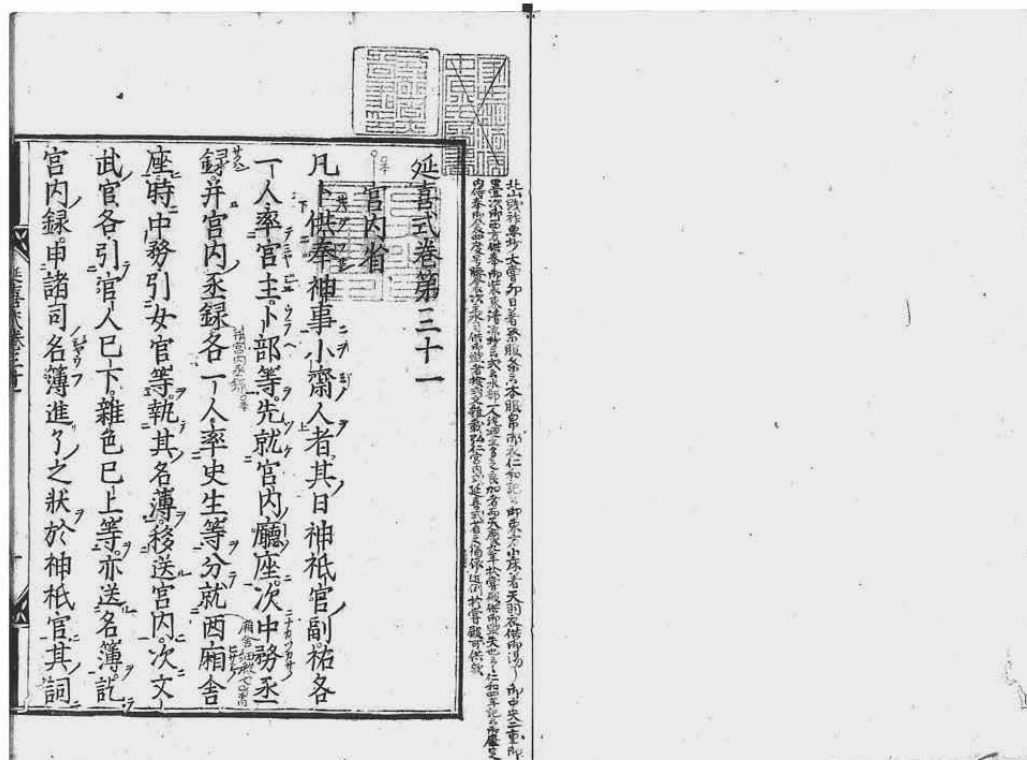
圖版 1-1



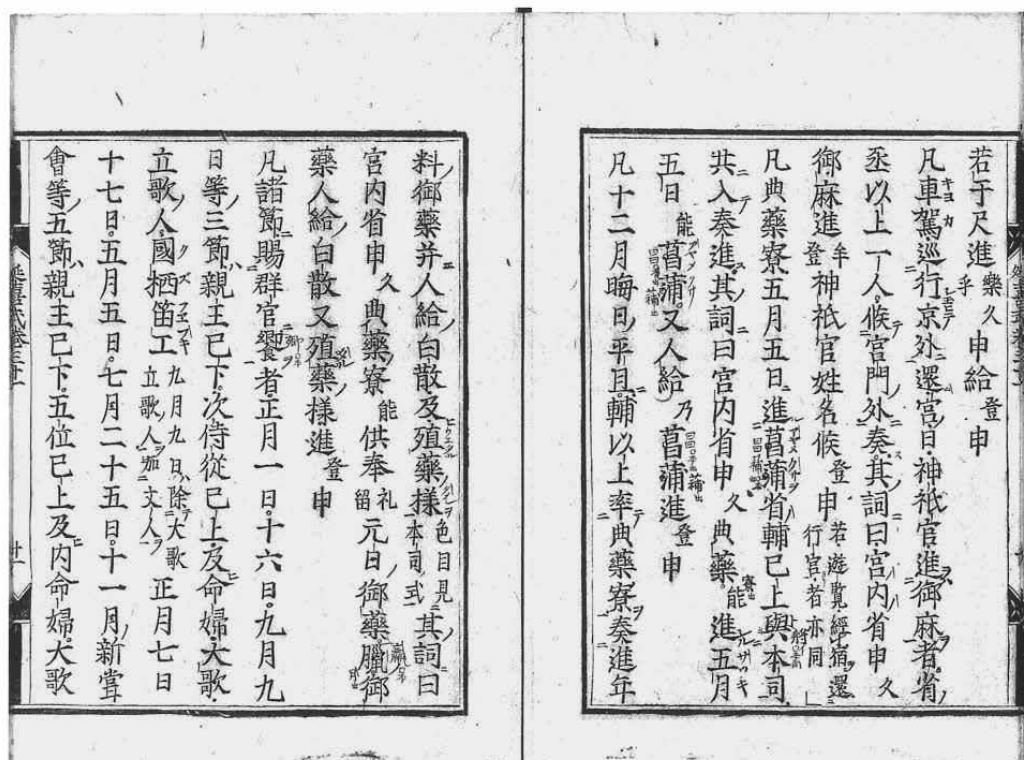
圖版 1-2



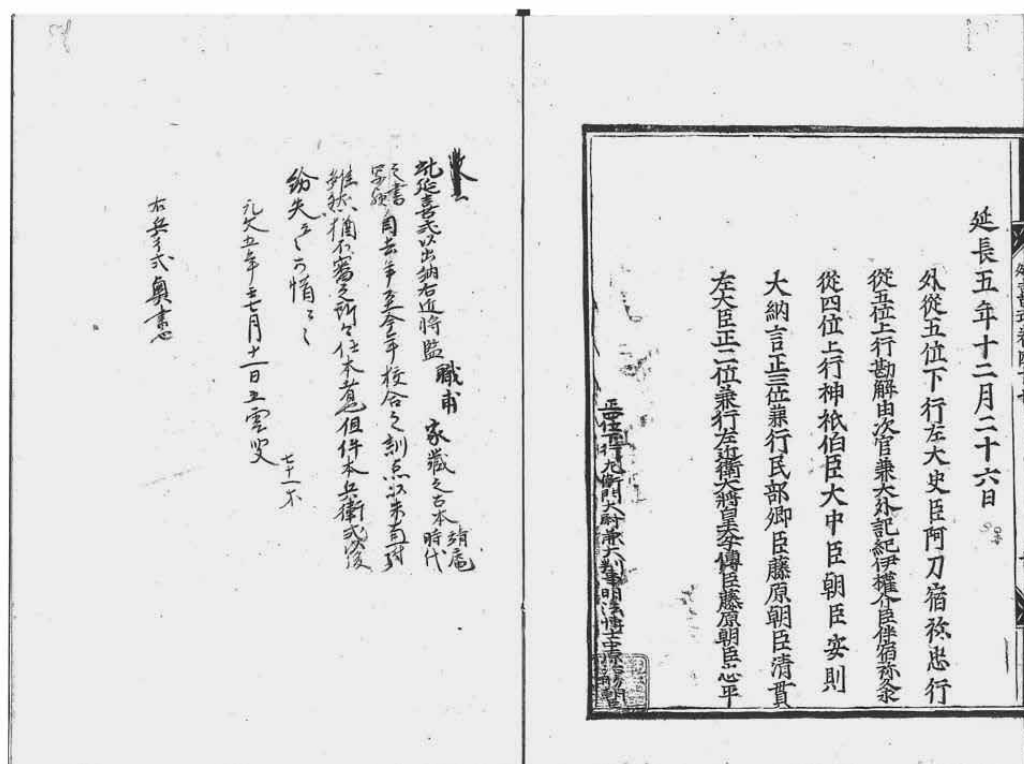
図版 2



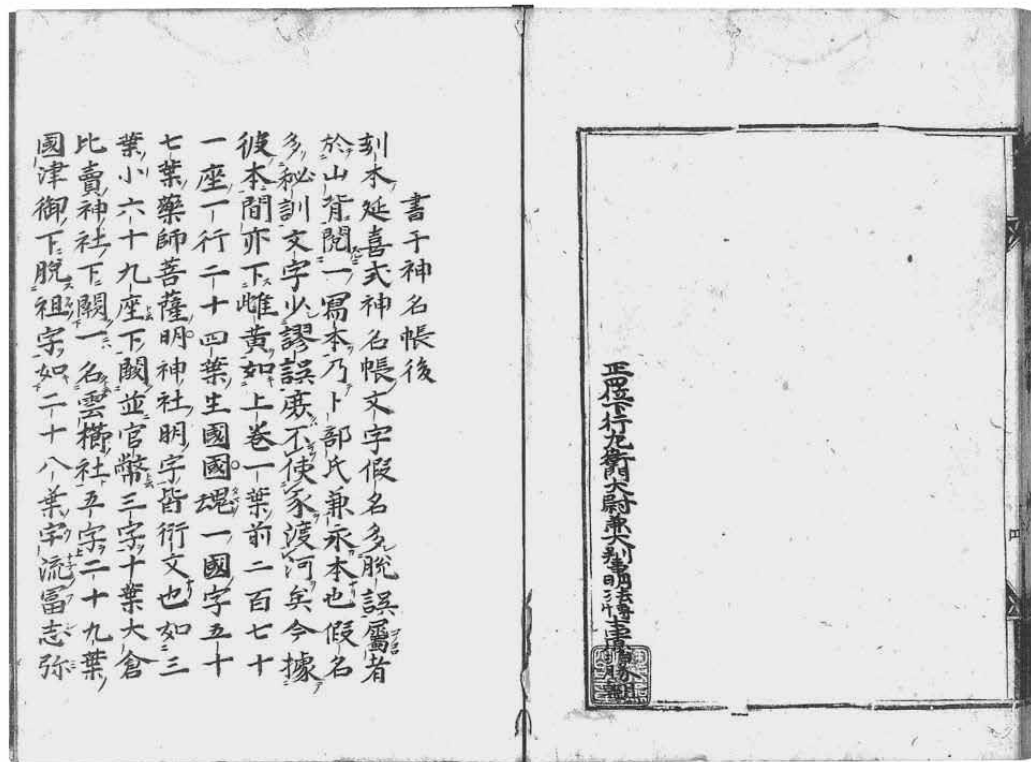
図版 3-1



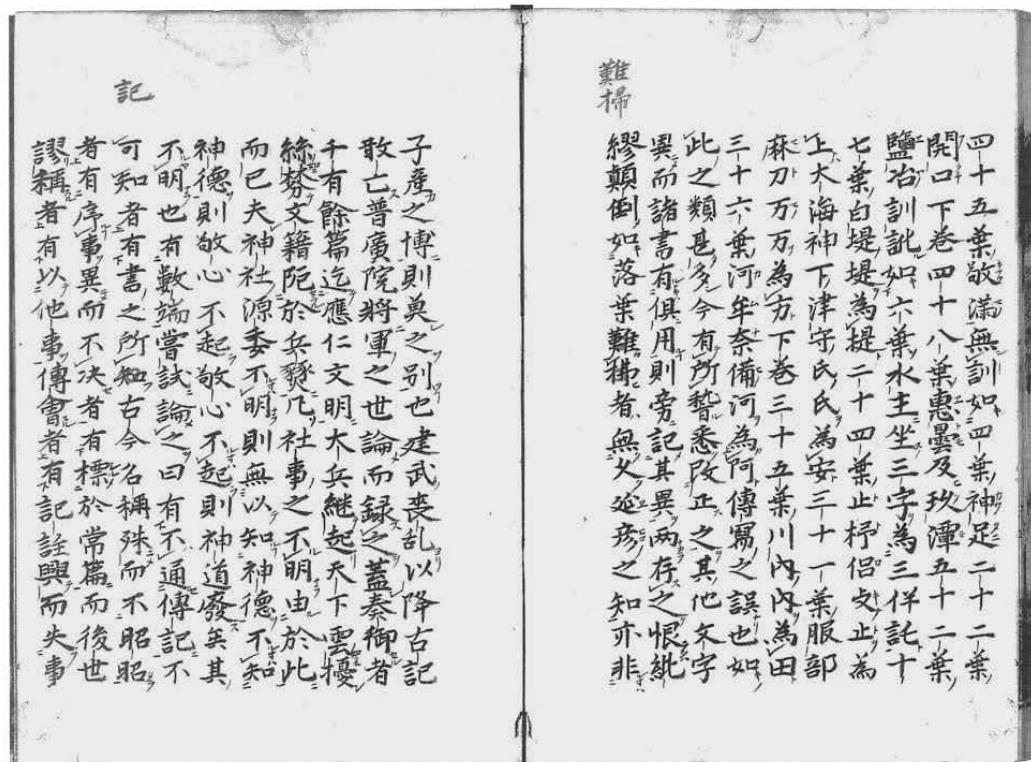
図版 3-2



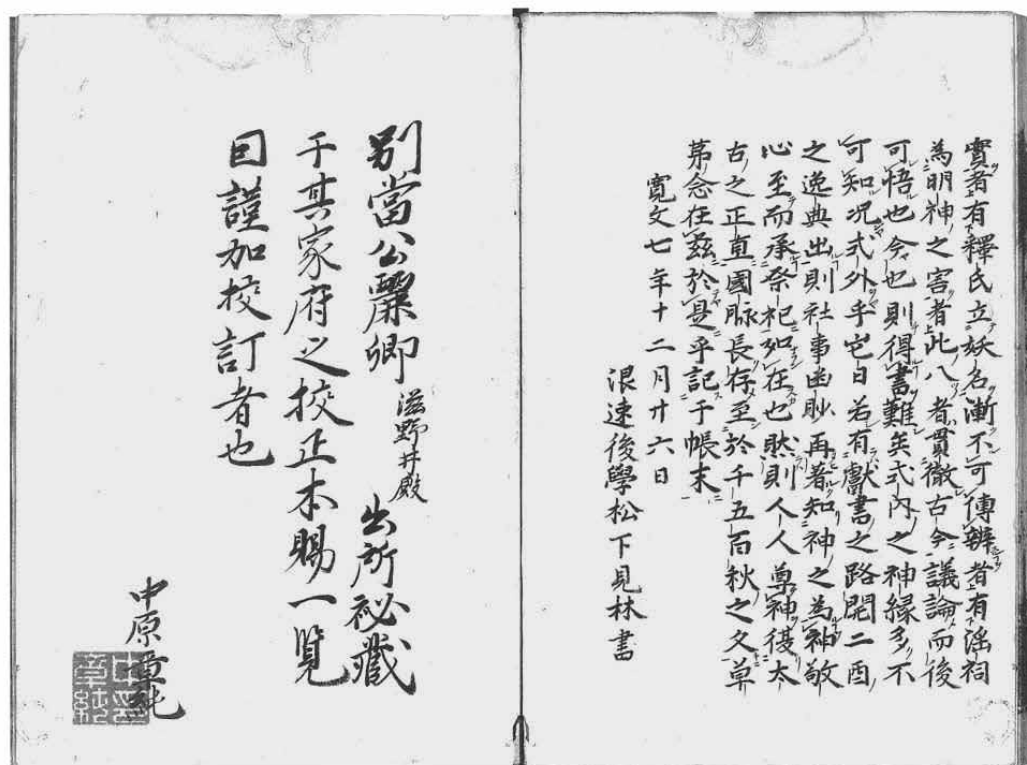
図版 4



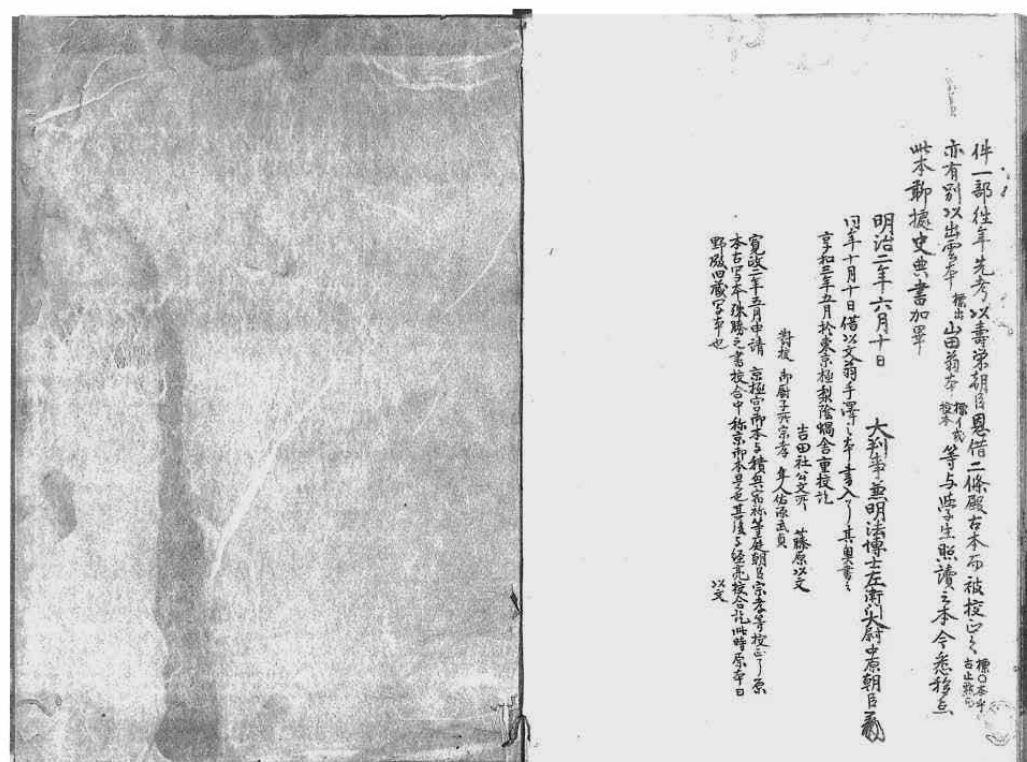
図版 5-1



図版 5-2



図版 5-3



図版 5-4